



2023

6 月号

第398号

# 真宗大谷派京都教区 教化広報誌 教区だより

Shinran  
500th  
SS00th

—金剛寺—  
南無阿弥陀仏  
人と生まれたことの  
意味をたずねていこう

今月の「ことば」

決めつけが

分かりあえない

関係をつくる

今月の「ことば」は、教区駐在教導が担当しています

## CONTENTS

2・3面	4面	5面	6面	7面
<b>連載</b> 第7回 真宗教団の中の 女性たち  みよし えつこ <b>見義悦子氏</b>	<b>特集</b> <b>慶讃だより</b> 真宗本廟慶讃法要 レポート	<b>特集</b> <b>慶讃だより</b> 慶讃法要 お待ち受け大会 若狭第1組	<b>特集</b> 福島子どもたち 一時避難受け入れの会 <b>保養事業</b> レポート	教務所からのお知らせ <b>イマダカラ</b>  8面 今月の行事予定

京都教区内の風景をお届けしています。『教区だより』では表紙写真の募集を行っております。詳しくは教務所（教区駐在教導）までお気軽にお問い合わせください。



(富山教区 正覺寺 副住職)

## 第七回 女性住職実現までの道のり③

一九九一年の「条件付き女性住職」ということは決して対等なる他者として女性を認めただけではなかった。しかし部落解放同盟への回答書の中で「女性の住職の問題を始めとする、女性の宗派における資格に関する問題も（中略）五年以内を目的として改正に向けての作業に入る」と回答したことによって、女性住職は条件付きとなったが「女性の教師陞補は入位まで」となっていたことと「女性僧侶堂班進席は准本座まで」となっていた制限は撤廃された。又、得度受式年齢も女性は成人以上であったのが男性と同じ九歳以上に改正された。これらはいずれも女性たちがこれまで要望書の中で訴えつづ

けてきたことである。こうして内外からの声によって少しずつ男性中心の教団の制度機構が揺らぎだしたことを感じた。

あらためて教団の歴史をひもといてみると、これまで一度も真正面から女性と向き合い声を聞くということはなかった。そんな教団にあって一九九四年一月に能邨英士内局が発足した。その内局の中に久留米教区の調紀氏が参務として入っておられた。以前から親交があったので直接電話をかけ「そろそろ女性の声を聞いてもらえないか」とお願いした。すると能邨総長から電話があり「改めて要望書を出して欲しい」といわれた。すぐに北陸の「おんなたちの会」の会員に連絡をとり要望書を作成して提出した（資料一〇 要望書②）。すると総長から「くわしく聞きたいので上山してきて欲しい」といわれ、組織の制度機構に疎いため、高岡教区の堀部知守議員に同行してもらって三、四名で上山した。

部屋に通されたところ、内局や部長たち（すべて男性）が一同に会しておられた。足が震えたことを覚えている。しかし、これまで一度も本当に向きあって声を聞いてくれたことがなかったことを思えば、この機会を無駄

にすることは出来ない、これまで声を出し続けてきた願いを必死の思いで伝えた。すると「宗務審議会」という形でなら可能であるといわれ、初めて聞く言葉であったが「お願いします」と即答した。そして教団初の女性の問題に関する宗務審議会「女性の宗門活動に関する委員会」が九月に設置された。メンバーは女性十五名、男性四名であった。

### 諮問事項

- I 住職就任とそれに関する問題について
- II 教導職等、女性の活動分野の促進について
- III 女性の教化組織について

委員会の会長は女性が務め、女性の課題を女性自らが審議するという、これまでの宗政にない画期的なものだといわれた。宗門の現実に気づいた女性たちが、この審議会の場で問題と感じたことに一つひとつ丁寧に向きあい、聞き取った内容から提言をした。一年五ヵ月にわたり審議し、一九九六年一月に「答申書」を提出した（資料一一）。その答申は『真宗』（一九九六年五月号）に全文が掲載された。聞くところによると、これまで答申の全文が『真宗』に掲載されたことはなかったという。取り組みの本気度が伝わってきた。

答申の前文には、

私たち宗門は、長い間固定的な性別役割分担を肯定し、問題意識から目を背けてきた。今男性自身が女性に対する差別意識から解放されること、そしてその男性のあり方を許してきた女性自身が、そのありかたを問い直すことを抜きにして同朋社会の実現は図れない。

女性と男性が平等に生きられる真の共同体になるこそが、信仰的課題であるといえよう。

とし、教団の性差別を問う運動は信仰運動であり、同朋会運動を推進するためにも解決しなければならぬ課題として提起した。ここに立つて教団の中に入り、教団を共に担ってきたい。

この答申を受けて、宗会を通して、女性住職についてようやく「男子である教師」が継承するという前提をなくし、性別や出生順による優先順位をなくした。現行の「寺院教会条例」がそれである(資料一三)。しかし「卑属系統」の文言が残ったことにより、大谷派の寺院の住職継承は世襲であることを示し、配偶者(坊守)より卑属が優先するものとなっ

ている。ちなみに世襲制については答申の中でも問題提起している。そして一九九六年十二月に宗務所組織部に女性室が設置された(資料一三)。初めて正式に女性の問題を取り組む一歩が踏み出された。

【資料一三】女性室開設に関する報道記事(『京都新聞』一九九六年(平成八年)二月三日付)

## 真宗大谷派「女性室」開設

### 住職夫人の研修充実

#### 「これから正念場」

真宗大谷派(本山・東本願寺)は十二日、京都市下した。大規模な伝統仏教京区の本内に女性対策専門団が、こうした部署を設けるのは珍しく、浄土真宗本願寺派や天台宗、曹洞宗、などをつくる全日本仏教会(事務局・東京)は「人権問題の一環として女性問題に取組む宗派は多いが、女性問題を専門的に扱う部署を特別に設ける動きは、真宗大谷派のほかは知らない」と、今後の活動に期待を寄せている。

同派は今年六月の宗議会で、女性の宗門活動活性化のため宗務所の組織部に「男女平等の実質を」源淳子・光華女子短大非常勤講師(女性学)の話

伝統仏教団で初の女性室開設は喜ばしいが、仏教界は教義や儀礼など根本的な

女性室の看板を掲げ、早速活動を始めた真宗大谷派の女性室のスタッフら(京都市下京区・東本願寺)

女性室を設けることを決め、検討を重ねてきた。この日午後、大玄閣近くの一室で行われた開室式では、能郵英士宗務総長と女性職員らが部屋への入り口に「女性室」の看板を掲げた。

女性室は、事務職員二人と見義悦子さん(西)と富山市・正覚寺住職夫人ら八人(女性五人、男性三人)の計十人。当面は住職夫人への研修内容を充実するほか、女性専用の啓発パンフレットを作る予定。

スタッフらはこの日、早速、初の会議を開き、女性システムの上で、本質的に男女平等になっていない。世の中の流れを形の上で追うだけでなく、男女共同参画の実質が伴うものであってほしい。

広報誌の創刊や住職夫人の研修内容などについて意見を交換した。見義さんは、女性の声を出す場が宗派内になかったが、十年前から女性問題の重要性を訴え始め、ようやくここまで来た。これからの一歩が正念場」と、と話をしていた。

※【資料一三】に関しては『真宗』一九九六年五月号または、『女性史に学ぶ学習資料集』を参照ください。

※【資料一〇】は『教区だより』五月号に掲載 ※【資料一三】は『教区だより』四月号に掲載。

※資料は『女性史に学ぶ学習資料集』(真宗大谷派解放運動推進本部女性室編)より抜粋

特集 慶讃だより

## 真宗本廟 慶讃法要

本山での「宗祖親鸞聖人御誕生八百五十年・立教開宗八百年慶讃法要」の参拝レポートの第二弾。四月に行われた第二期法要に鳥取県因伯組より参拝に向かわれた際の様子をお届けします。

出版部会 藤野 顕生

二〇二三年四月二十一日、因伯組より一泊二日の行程で慶讃法要へ参拝した。ご門徒三十八名、大型バスにて組内四カ所を経由して五時間半かけて京都へ。今回ご参加された方の中には、初めて本山にお参りするという方も多く、「初めての方にも本山で何か感じて貰えたら」という思いと、「いや、そういう考えは何だか上から目線じゃないだろうか」という思いが錯綜し、何だかモヤモヤとしながらバスに揺られていた。

昼食後、京都南座にて五木寛之原作「若き日の親鸞」を観劇。苦悩を抱えながらの比叡山での修行、法然上人との出会い、流罪までの聖人の前半生を描く。架空の人物も登場し、斬新な解釈でテンポよくストーリーが展開していく。「人はなぜ苦しまなければならないのか」と悩む人間・親鸞と、「人は皆、平等である」という信念のもと、ひたむきに民衆に念仏を勧める法然上人に心を動かされた。

二日目、御影堂へ参拝。この日は海外開教

区からの団体参拝もあり、内局挨拶にて木越宗務総長が英語も交えて挨拶をされた。法話は大坂教区・藤政朋宏師。「生活の中でふと感じる生きることへの虚しさ、これは心の奥の奥に、本当に満足できる人生を生きたいという願いがある証拠ではないでしょうか」、「役に立つ・立たない、ということでも、私たちは悩み苦しむけれども、誰とも比べることなく尊いという世界があることを見出されたのが積尊の教えなのでしょう」と、ご門徒さんやご自身のお子さんとの関わりを通して丁寧にお話し下さった。

午後からは京都国立博物館を見学。博物館では慶讃法要にあわせて特別展「親鸞―生涯と名宝」が開催されており、中でも仏光寺派に伝わる御絵伝(『善信聖人親鸞伝絵』)に目を奪われた。こちらは聖人が六角堂参籠の折に救世観音にまみえた「六角告命」の場面が描かれているのだが、静謐な雰囲気の大谷派の御絵伝とは異なり、聖人の周りに当時の様々な身分の人々が生き生きと描かれて



いる。以前この御絵伝についてお聞きする機会があり、ぜひ一度拝見したいと思っていたので感動もひとしおであった。また聖人御真筆の聖教も多数展示されていた。このたび慶讃法要を迎えるにあたり、正直なところ「自分にとって親鸞聖人とは」という大事な部分があはつきりしていなかったのだが、いざ実物を前にすると、聖人はこの私のためにご苦労され、生涯かけて念仏を勧めて下さったのだな、という実感が湧いてきて目頭が熱くなった。

帰りのバスの中で参加者のお一人が「大きなお寺なのに拝観料を取らないのは偉いね」と仰った。今まで当たり前前思っていたが、なるほど確かにそうだ。真宗本廟は誰にでも「帰依処」として開かれてある。それぞれ立場の違う一人ひとりが一緒に手を合わせることでできる場所。だから、今回たまたま私に誘われ初めてお参りされた方が、逆に私に念仏を勧めて下さっているということでもある。多くのことに気付かされた慶讃法要となった。

特集 慶讃だより

### 若狭第一組 お待ち受け大会

本場で「宗祖親鸞聖人御誕生八百五十年・立教開宗八百年慶讃法要」が三月から四月にかけて勤まりました。各地でも本山での慶讃法要に前後して慶讃法要お待ち受け大会が開催されています。

『教区だより』の特集にて各地での慶讃法要の様子をお届けしています。今月は三月に行われた若狭第一組のお待ち受け大会の様子をお伝えします。

#### 若狭第一組組長 三原隆広

二〇二三年三月五日（日）、講師に乾文雄先生（近江第五組正念寺住職・大谷中学高等学校講師）をお招きし、サン・サンホーム小浜（小浜市総合福祉センター）多目的ホールを会場に、宗祖親鸞聖人御誕生八百五十年・立教開宗八百年慶讃法要お待ち受け大会を兼ね、若狭第一組同朋大会を開催した。

乾先生は昨年の八月号から『同朋新聞』に「親鸞聖人にであう」を連載されている。「聞・問・開」の教えを聞き、自己を問い、問い得た自己を開く」の講題は、一見難解だが、先生は満足した人生を願いつつ、生活に不満・不平・不足を感じて生きている現実など、年代不問の具体的な課題を挙げながら、小事を大事と思ひ込み、煩惱に振り回されては本当に大事なことを忘れていた私。そんな私に「聴

聞していこう、自分を問うていこう、自己を、関係を開いていこう」というところに立たせてくださるのが本願念仏の教え、立ち止まるきっかけをいただくのが、お待ち受け・年忌・報恩講などすべての仏事ではないか、とまとめられた。閉会後のご門徒の「今日はとても新鮮なお話を聞かせていただきました」という感想は印象的で、日頃の法話のありようを考えさせられた。

お待ち受け大会が慶讃法要直前となったのは、若狭第一組の組門徒会が諸般の事情の中で活動停止の状態が続いていたことがある。この度、ようやく新体制で再出発することがかなったが、その第一歩は是非「組門徒会研修」から始めたい、具体的には、お待ち受け大会を組門徒会が組織化委員会と共同で開催するという、聞法からスタートしたいという願いがあったからだ。

そして今一つ、昨年十二月の若狭第二組お待ち受け大会に際し、山名組長から「若狭第一組のご門徒の皆様にも是非

「ご聴聞を」と、大変有難いご提案をいただいたことが大きい。その例にならない、今回のお待ち受け大会には若狭第一組のご門徒はもとより、若狭第二組のご門徒も多数ご参加いただき、活気あふれるお待ち受け大会となった。

若狭地区全体でみれば、昨年四月の一楽真先生をお招きしての「若狭地区」、十二月の川村妙慶先生をお招きしての「若狭第二組」、今回の乾文雄先生をお招きしての「若狭第一組」、計三回のお待ち受け大会、そして親鸞聖人御誕生会ご正當、四月一日の慶讃法要（音楽法要）団体参拝という、期せずして一年を通しての大きな聴聞の流れになった。この聴聞の流れを今後も大切にしていきたい。



特集 福島の子どもたち一時避難  
受け入れの会 保養事業レポート

三月三〇日～四月二日に行われた「福島の子どもたち一時避難受け入れの会 保養事業」の取材レポートです。

出版部会副主査 蒲池義圭

東日本大震災より十二年の歳月が過ぎた。今年も福島から京都教区へ保養に来る子ども達がいる。おもえば、二〇一一年に生まれた子どもたちはこの春、中学生になった（四月一日生まれまで）。それだけの時間が過ぎたという事実をあらためて考えさせられる。その間私たちは、いや私は何をしてきただろうかと。ご存知のように、大震災による地震と津波によって多くの地域で甚大なる被害が出た。それだけでも、目を覆いたくなるが、それに加えて原発事故という大惨事もたらされた。放射能被害により、福島の人び



との中には故郷を追われた人もいる。十二年経ち、除染活動も行われ、徐々に帰宅困難地域とされた場所も解除され、人々が帰ってきているとの報道も聞く。しかし、未だに戻れない地域もあり、故郷に帰ることをあきらめた人たちの思いを聞くこともある。それに除染の際に生じた汚染土は今もなお、福島の地に中間貯蔵という形で保管されている。その行き先（最終処分地）はまだ決まっていない。原発から出る放射能汚染された処理水の問題もいつ終わるのかは定かでない。情報としては知るこれらのことは、福島から離れた地にいる私には日常ではない。しかし、福島の人たちには今もそばにそれがある。

そんな中、放射線の影響を受けやすい子どもたちを一時的に避難させ、その間に放射線の影響を一時的にでも体から軽減させることを目的に保養事業が各地で行われた。京都教区でも「福島の子どもたち一時避難受け入れの会」が作られ、これまで活動を続けている。新型コロナウイルス感染症の影響で、二〇二〇・二〇二一年は休止を余儀なくされたが、昨年より再開し、今年も六組十八人の親子が参加して保養事業が行われた。

今年度の保養事業はその拠点を滋賀県の近江八幡に置いた。初日、同会のメンバーの待つJR近江八幡駅に参加する各家族が次々と集まった。初期の頃はバスでの移動で、こちらまで来るだけで相当な疲労もあったようだが、今は電車移動のためそれほどでもないようだ。集合し、宿舎へ向かう途中に、八幡山へ観光へ出かけた。その合間に参加者の親子に話を聞くことができた。

たこと。至る所に放射性物質があるということを知らずに、子どもたちを遊ばせていたこと。公園の茂みや近くの雑木林、はたまた、自宅の屋根の樋や側溝にも放射性物質が溜まっていた事実を知ってぞつとしたこと。通わせていた二本松市の同朋幼稚園で保養事業があることを知って参加したとの経緯も聞いた。それからは、保養事業に参加すると一時であつても心が落ち着けたことや、娘さんからはこちらに来て、公園で思いっきり遊べたことがうれしかったという言葉も聞いた。

同会の三品正親会長は「この地（関西）にいと十数年経って放射能汚染、福島の子どもたちへの影響ということに対する意識が薄れてきている気がする。しかし、あれだけの傷が十数年で消えるものではないと思う。そのことを忘れてはいけない。保養に来た参加者の皆さんにはゆつくり保養して鋭気を養ってもらいたい」と語る。参加者の顔にも不安さは無い。この活動を通じて少なくとも人たちの助けになつてきたことは容易に想像することができる。また、そのことは母親たちからも聞く機会は多数あつた。同会がそんな活動を続けてくれたことに敬意を覚える。そしてこれからも続けてもらえることを願うばかりだ。



教務所からのお知らせ

【得度受式者】

二〇二三年五月七日

- ・山城第一組 教圓寺 内藤 達也
- ・山城第三組 慶念寺 權藤 真樹
- ・近江第一組 本立寺 比良 正希
- ・近江第一組 本立寺 比良 いづみ
- ・近江第六組 弘教寺 廣瀬 清香
- ・近江第六組 弘教寺 廣瀬 清香
- ・丹波第二組 正誓寺 森下 早耶
- ・丹波第二組 正誓寺 山本 マキ
- ・石 東 組 善徳寺 河野 祐子

【敬申】

ご生前のご功勞を偲び、謹んで哀悼の意を表します。

- ・近江第四組 真光寺 前坊守 谷 広子 七十歳
- 二〇二三年 四月 二十四日
- ・近江第十一組 法縁寺 前坊守 竹中 美智子 九十八歳
- 二〇二三年 五月 二日
- ・出雲組 正藏坊 前坊守 多賀 章子 九十五歳
- 二〇二三年 四月 四日

〔寺院教会番号順敬称略〕

「右手で右手は叩けない」

二日に一度、風呂場で頭を剃る。これが私のルーティンだ。

昨年の六月にスキンヘッドデビューをした。実に得度をした時以来だった。スキンヘッドは手入れが楽だと思っていたが、実際は維持するのにとても時間と手間とお金がかかることがわかった。なぜなら、僕は人一倍毛量が多く、毛根は若々しく力強く生えてくる。少しでも髪が伸びるだけで私生活に悪影響を及ぼす。ほんの少し伸びた毛は、まるで壁に張り付く蜘蛛の足の如く、あらゆるものに引っかかってしまう。エアリズムの肌着ですら頭を出すのが面倒だし、暖簾をくぐると頭部を後ろへ持つていかれる。これではとてもストレスが溜まってしまふ。

そんなことで二日に一回のペースで剃る。それでも間に合わない程であるが、とは言え毎日剃ってられない。一度に一〇分ほどかかる為、一年間に約六〇時間ももの尊い寿命を、毛と同時に削る

# イマダカラ

事になる。

そもそもなぜ、スキンヘッドにしたのか。それは煩惱からの解放だった。常にカッコよく見られたかった。香り高いシャンプーを使い、スタイリング剤を買って漁り、ヘアセットに時間を割いていた。髪の毛は「私」の表現だった。しかし、そんな自分も歳をとり、家族に恵まれ、もうかつこよくする必要はないのでは、と思い「私」を削ぎ落すことにした。もう周りの目を気にせず、悩まない為に。

ところが刈り取った「私」は色を変えて、ちがう「私」が生えてきた。今までと何もかわらない。むしろ新芽のように勢いよく「私」が噴き出てきた。SchickのT字カミソリを買って、スキンヘッドに合うフアッションを模索し、日焼けサロンに行きたくてうずうずしている。

ふと「右手で右手は叩けない」と自力無効を教わった言葉を思い出した。私を私の意志では超えられない。私を超えたものに出遇わなければならないのだろう。(青少幼年教化部会 仁科 洸)

## 編集後記

The editor's note

先日、京都国立博物館に親鸞聖人生誕850年特別展を観に行ってきました。

親鸞聖人の生涯を伝える伝絵は大谷派、本願寺派、高田派等、それぞれ少しずつ違って比較して観てみると面白い。例えば有名な六角夢想の絵は猿回しや酔っ払い、子供や女性が描かれている。仏光寺派に対して大谷派のものはそういった人々が一切描かれていない。どうしてこうなったのか興

味深い。親鸞聖人の思いとは別のところで、作成した側の思惑があるのだろうなと感じる。また、同じ仏光寺派のもので少し驚かされた絵もあった。それは親鸞聖人が幕府から要請を受けて「一切経校合」を行ったであろうという場面。何か品物を受け取っているようにも見える。生きていければいい。そんなことがある。人間のおかしさが出てくるように、笑える場面でもあった。

(出版部会 仲野 恵理子)

## 京都教区 6月の行事予定

### 教区・地区・関係団体事業

5日(月)	12:00～17:30	同和協議会 協議会学習会 (フィールドワーク)	京都市内
14日(水)	8:45～16:00	坊守会 基礎講座 (フィールドワーク)	延暦寺
16日(金)	16:30～18:00	仏教青年会 公開講座 講 松崎智海 氏 (本願 永明寺)	教区会館2階 大講堂
21日(水)	13:00～17:00	靖国問題学習会 公開学習会 講 浜口和也 氏 (四國 誓願寺)	教区会館2階 大講堂

### 教区諸会議

1日(木)	10:00～12:00	教区慶讃総合調整部会	教区会館2階 大講堂
1日(木)	13:30～17:00	教化推進本部 調整協議会	教区会館2階 大講堂
5日(月)	10:00～15:00	坊守会 本部役員会	教区会館2階 会議室
5日(月)	15:00～18:00	准堂衆会 総会	教区会館2階 大講堂
6日(火)	9:30～16:00	坊守会 常任委員会	教区会館2階 会議室
7日(水)	13:30～16:30	教化推進本部 出版部会 (Zoom 会議)	Zoom
9日(金)	13:30～16:30	新教区準備委員会 常任委員会	長浜教務所
13日(火)	13:30～16:30	教化推進本部 共同教化部会	教区会館3階 会議室
14日(水)	10:00～12:00	教区会館 管理運営委員会	教区会館2階 大講堂
14日(水)	13:30～17:00	参事会 常任委員会	教区会館2階 大講堂
20日(火)	13:30～16:30	新教区準備委員会	しんらん交流館
22日(木)	10:30～16:00	坊守会 臨時総会	教区会館2階 大講堂
22日(木)	13:00～16:00	議員協議会・常任委員会 合同懇談会	しんらん交流館

### 教区別院事業

5日(月)	13:00～14:00	赤野井 定例法要	赤野井別院
6日(火)	13:30～15:30	山科 同朋の会 法 赤松崇磨 師 (教区駐在教導)	山科別院
6日(火)	14:00～16:00	伏見 声明作法講座	伏見別院
10日(土)	14:00～16:30	伏見 同朋の会	伏見別院
13日(火)	14:00～16:00	大津 同朋の会 法 服部順子 師 (近江 第2組 安随寺)	大津別院
15日(木)	14:00～16:00	山科 定例法話 法 長紀子 師 (近江 第9組 願念寺)	山科別院
27日(火)	14:00～16:00	伏見 ご命日のつどい	伏見別院
27日(火)	13:00～14:00	赤野井 定例法要	赤野井別院

### 各地区等の慶讃法要お待ち受け大会

18日(日)	13:00～17:00	近江第25東組 お待ち受け大会 法 秦信映 師 (長浜 第24組 明德寺)	願心寺 滋賀県長浜市西浅井町小山 332
--------	-------------	---------------------------------------	----------------------

真宗大谷派 京都教区 教化広報誌  
『教区だより』第398号  
[発行人] 篠岡誓法(真宗大谷派京都教務所長)  
[発行所] 真宗大谷派京都教務所  
〒600-8164 京都市下京区花屋町通烏丸西入  
Tel:075(351)5260 Fax:075(351)5256

【表紙の写真】アジサイ(京都教務所 仁宗寿)  
発行日 2023(令和5)年6月1日  
メールアドレス: kyoto@higashihonganji.or.jp

真宗大谷派 京都教区 Webサイト  
https://www.k-kyoku.net

京都教務所

検索

